

**Mapping Yourself onto a New Information Environment****情報環境論**

担当者: 加藤文俊 (かとうふみとし)

[http://web.sfc.keio.ac.jp/~fk/ie\\_06F/](http://web.sfc.keio.ac.jp/~fk/ie_06F/)メール: [fk@sfc.keio.ac.jp](mailto:fk@sfc.keio.ac.jp)

研究室: 6 (イオタ) 407・内線 53247

オフィスアワー: 月曜日 14:30~16:30 (他の曜日・時間については調整します)

**【講義案内】**

この授業では、わたしたちをとりまく「情報環境」(＝まずは広い意味で、さまざまなコミュニケーション活動を実現する環境としてとらえるところからスタートします) の特質を理解することを目指します。とりわけ、情報環境の「もっともらしさ (plausibility)」や「あたりまえ感 (embeddedness)」が、日常生活においてどのように構成されるのかについて考えます。

そのためのひとつのアプローチとして、わたしたちが比較的容易に観察可能な〈モノ・コト〉を、「社会的な構成物 (social construction)」として理解し、テクノロジーの社会的構成 (たとえば Bijker ほか, 1987) という立場から考えます。さまざまなテクノロジー (メディア) は、わたしたちの生活の諸側面を変容させます。そして、テクノロジー (メディア) が普及し、わたしたちが受容し活用することによって、テクノロジー (メディア) にあたらしい意味が付与されます。つまり、人とテクノロジー (メディア) は相互構成的な関係にあるのです。情報環境は、そのデザイナーや開発者の意図しないスタイルで理解され、使われることがあります。また、たんに技術的な理由では説明することのできない、社会的・制度的条件や意思決定の所産として、カタチづくられている場合も少なくありません。テクノロジー (メディア) がわたしたちの可能性を拓げるのと同様に、わたしたちがテクノロジー (メディア) に可能性と限界をあたえているのです。

テクノロジーの社会的構成というアプローチは、事後的に〈モノ・コト〉をふりかえり、記述・説明するというスタイルにならざるをえません。その意味で、日常生活のあり方や、さらに社会的・文化的な文脈について「ヴィジョン」をつくるということについては、物足りないアプローチだと言えます。しかしながら、「ヴィジョン」をもつということ、未来像を思い描くばかりでなく、現状を正しく観察し、過去を復原することも含めた「状況を読む」ことだと考えるならば、「どのようなプロセスを経て、(いま・ここで) 観察可能なカタチが構成されたのか」について洞察をくわえることはきわめて有意義だと言えるでしょう。

この授業では、わたしたちにとって馴染みぶかい環境 (たとえばキャンパス) を、〈情報〉という観点から記述し、評価することを試みます。今学期はキャンパスに整備されつつある、あたらしい情報インフラを活用した社会実験をおこないます。詳細については講義で紹介しますが、ここ数年で SFC の主要な講義教室や特別教室、学生ラウンジ (サブウェイ)、メディアセンターにはアンテナが設置されました。RFID タグを首からぶら下げてキャンパス内を歩いているだけで、(アンテナの圏内であれば) いつ・どこにいるか (いたか) というデータが収集されることになります。もちろん、ひとではなくモノにタグがついていれば、機材がどこにあるか (どこに移動したか) などがわかるはずで

RFID タグを活用したインフラをめぐって、さまざまな試みがありますが、こうした仕組みを整備しているキャンパスはおそらくは必ずです。もちろん、個人情報に関わることなので、地域コミュニティや社会に広げていくにはいろいろな制約があります。ただ、その点については、大学であること、そして授業と連動したひとつの実験であることを活かしながら、すすめてみたいと考えています。試行錯誤をつうじて、おそらくは問題点も見つかることになり、また「適切」な技術の居場所・使い方が見つかるはずで

今年度の「情報環境論」では、このインフラを実験的に利用します。実験に参加するマインドも必要です。(同時に、実験なので、予期せぬ展開をするかもしれませんが、それについてはあらかじめ理解しておいてください。もちろん、キケンなことはありません。)

具体的には、履修者はRFID タグを学期中携帯し、みずからの行動履歴を取得・蓄積します。基本は「とき」(時間)と「ところ」(位置)に関するデータです。これを加工すれば、人びとの移動(あるいは滞留)、行動軌跡やパターンなどとして理解することができます。このデータをつかって、どのようなキャンパス・ライフが可能か、自由にシナリオを描いてもらいます。もちろん、タグのデザインが「カワイくない」と思う場合には、実用性を損なうことなくあたらしいデザインを提案してもらおうことも必要になります。

技術的な解説その他については、南政樹講師(政策・メディア研究科)とベルーガ・プロジェクトのサポートによって運営します。学期をつうじて、具体的な情報環境をデザインするグループワーク(2~4人程度)をおこなう計画です。内容は簡単なプログラミングをとまいませんが、プログラミング入門程度の経験と知識で十分対応できます。シラバス上は加藤の担当科目になっていますが、機材をはじめ、インフラ利用、およびプログラミングに関わる部分は南さんの協力で実現します。

※詳細は第1回目の講義で説明しますので、履修を考えているひとはかならず出席してください。

#### 【提出課題・試験・成績評価の方法など】

- 出席、グループワーク、プレゼンテーションなどで総合的に評価します。
- 大まかに、下記のような流れで作業をすすめることとなります。詳細については授業時間に説明します。
  - (1) みずからの行動履歴を記録する
  - (2) 情報環境のデザイン(中間プレゼンテーション)
  - (3) 情報環境のデザイン(最終プレゼンテーション)
 \* (2)(3)はグループワーク
- このほかに企画書やふり返り(自己評価)等を学期中に提出することとなります。最終試験はおこないません。

#### 【履修上の注意・その他】

- 3・4年生および大学院生の履修を想定しています。
- キャンパス内にあらたに設置された情報機器を活用した実験に参画します。それに応じて、クラスの内容や課題等も変わる可能性があります。現時点では、具体的な情報環境をデザインするグループワーク(2~4人程度)をおこなう計画です。内容は簡単なプログラミングをとまいません。

#### 【教材】

下記は、講義で取り扱う理論や事例研究に関する参考文献です。他にも、必要に応じてクラスで資料や文献リストを配布します。

- ウィノグラード, T. & フローレス, F. (1989) 『コンピュータと認知を理解する:人工知能の限界と新しい設計理念』(産業図書)
- カロン, M. & ロー, J. (1999) 「個と社会の区別を超えて:集団性についての科学技術社会論からの視座」岡田猛, 田村均, 戸田山和久, 三輪和久(編著) (1999) 『科学を考える:人工知能からカルチュラル・スタディーズまでの14の視点』第9章(pp. 238-257)(北大路書房)
- シャロン, J. M. (1988) フランスにおけるビデオテクスの変容:インタラクティブ・サービスからコミュニケーション・サービスへ『海外電気通信』1998年1月号(pp. 33-47)
- 中島秀人(2002) 「テクノロジーの社会的構成」金森修, 中島秀人(編著) (2002) 『科学論の現在』第3章(pp. 63-87)(勁草書房)
- 原田隆司, 寺岡伸悟(2003) 「スナップショットの方法」原田隆司, 寺岡伸悟(2003) 『ものとの社会学』序章(pp. 1-22)(世界思想社)
- バーガー, P. & ルックマン, T. (2003) 『現実の社会的構成:知識社会学的論考』(新曜社)(改題)

新版)

- ヒューズ, T. (1996) 『電力の歴史』 (平凡社)
- ペトロスキー, H. (2003) 『ゼムクリップから技術の世界が見える: アイデアが形になるまで』 (朝日選書) / Petroski, H. (1996) Invention by design: How engineers get from thought to thing. Cambridge: Harvard University Press.
- ペトロスキー, H. (1993) 『鉛筆と人間』 (晶文社)
- マーヴィン, C. (2003) 『古いメディアが新しかった時: 19世紀末社会と電気テクノロジー』 (新曜社) / Marvin, C. (1988) When old technologies were new: Thinking about electric communication in the late nineteenth century. Oxford University Press.
- Bijker, W. (1995) Of bicycles, bakelites, and bulbs: Toward a theory of sociotechnical change. Cambridge: The MIT Press.
- Bijker, W. and Law, J. (1992) Shaping technology/building society: Studies in sociotechnical change. Cambridge: The MIT Press.
- Bijker, W., Hughes, T., and Pinch, T. (1987) The social construction of technological systems. Cambridge: MIT Press. とくに、Part I: Common themes in sociological and historical studies of technology.
- Tufte, E. (2003) The cognitive style of PowerPoint. Cheshire: Graphics Press.

【スケジュール】 (version 1.0)

木曜日	内容	備考
1 9/28	オリエンテーション 授業のすすめかた・基本的な考え方について	
2 10/5	情報環境をどう考えるか ▲南	* 課題の説明 * タグの配布・登録
3 10/13	あたらしい情報環境 ▲南	* 実習
4 10/20	データ収集と表現	
5 10/27	メディア環境の社会的構成	* グループ分け
6 11/2	プレゼンテーション (1) ▲南	
7 11/9	システム論的思考	
8 11/16	アクターネットワーク理論	
9 11/30	プレゼンテーション (2) ▲南	
10 12/7	ゲストレクチャー (調整中)	
11 12/14	創発的なコミュニケーション環境	
12 12/21	まとめ	* アンケート調査
2007年		
13 1/11	プレゼンテーション (3)	

※授業の構成や内容は、クラスの進行状況に応じて調整します。

※ふりかえりレポートの提出期限は、1月31日(水)(予定)。